

令和七年度

第八〇回仙台第二高等学校入学式

祝辞

わたくしは、子供の頃から、毎年眺めていたのですが、宮城県仙台第二高等学校に桜花満開に咲き誇る季節を迎えようとしております。このような春の季節を迎え、仙台二高における、令和七年度、第八〇回、入学式が、ここ講堂において、無事挙行されることとなりました。

栄えある今日を迎えた新入生は、男子一八〇名 女子一四〇名、合計三二〇名とお聞きしております。宮城県仙台第二高等学校同窓会を代表いたしまして、勉学を積み重ね、見事合格した新入生の皆さんにお祝いを申し上げます。と共に、今日というこの入学式を迎えるにあたって、これまで一生懸命にサポートに徹してきた保護者の方々が、このように多数列席いただきありがとうございます。と同時に、わたくしからも、皆様方に衷心よりお祝い申し上げます。

もともと「いはふ」という言葉は、魂を鎮めるために精進潔斎を表す言葉だそうです。近代では、幸福な光り輝く現状を讃美し、将来もかくあるべしと、幸せな状況をみんなで喜び合う意味になったのだと、言われております。入学式は、新入生をお迎えするために「いはふ」儀式であり、最初の「おもてなし」をする場となっています。ここ講堂にお集まりの新入生は、はじめて仙台二高という共同体に入るべく、訪れた「客人まれびと」といえるかもしれません。

もう、すでに七〇年を経過していますが、わたくしの幼き頃を少し思い出してみます。小学一年生の春、青葉の山、青葉城址へ、花見遠足で登りました。小学校時代、毎夏、松淵、賢淵の廣瀬の流れで水泳をしました。とにかく、牛越橋から澱橋までの河原は、風揚げなどする遊び場でした。中学生や高校生になっても、澱橋の袂たもとの土手によく寝そべっていました。青空を移動する雲の流れを追うと、いつの間にか雲に身をまかせている自分を発見し、身体までもふわふわ動いていく感覚にとらわれます。将来の生きる方向性が定まらず、悩んでいたからかもしれません。

そのような時期、絵を描くことが唯一の楽しみでした。線を引く、色を塗る行為が楽しい。画面のなかの、その線と色とを見ていると、心が少し動くのです。筆を動かすと、次の一手のアイデアが生まれ、線が加えられ、色も加えられる。目による対象物と画面との往還には、手の運動も加わり、知らず知らずのうちに、画面はできあがってきます。そこには、自意識によるコントロールではない、無意識の心身の働きがあったようなのです。おそらく、明暗、色彩、形態、空間、時間、さらには音響、触れ合い、香り、味わいなどが多岐多様の仕方で結び合い、さまざまな気分や感情や意志が心身の働きに結びついていたのかもしれない。

このような絵画制作という二高美術部での体験が積み重なり、二年次には、美術教師二宮不二磨先生のすゝめもあり、東京藝術大学絵画科油画専攻受験へと舵を切ったのです。

話は変わりますが、男女共学となつて、はや二〇年が経過しているとお聞きしております。男女共学発足当時、同窓会をはじめ反対運動が繰り広げられたと聞いております。わたくしなりに振り返ると、太古、縄文時代から続いている魂たましい、霊魂れいこんの存在が問題になっていたのではないのか

と、思うのです。魂は自分のものだからといつても、こればかりはどうにもならない。自分の意思で変えようと思つても、動かそうと思つてもどうすることもできません。人を愛する、恋するということも、魂の仕業であると。相手の魂を乞う、すなわち魂をもらおうとする行為ではないのかと考えられておりました。しかし、魂を相手に取られては、困ります。一日中、平穩でいられない、勉強が手につかない、困つてしまいます。それゆえ、初期段階においては、相手に魂を渡さないように、男女の間でさまざまな駆け引きが行われていました。万葉集の相聞歌に見受けられるように、二律背反アンビバレントの感情や、争闘をともなつてしまう場合もあったのです。このような本能のなせる技わざを避けるためにも、男女別学がかつては世の常識となつていたのかも知れません。現在の男女共学である仙台二高の実情は詳しくわかりませんが、おそらく男女というよりも、おたがいがそれぞれの立場を尊重し、多様性を秘めたそれぞれの人格を認め合う仲間として接しているような気がしております。人と人の会話、コミュニケーションは、微笑み合いながら、共に感じ合い、積み重ねられ、仲間としての信頼感が生まれ、この小さな共同体はより活性化するのでしょう。

わたくしが仙台二高生であつた当時、新入生、在校生とも等しく応援練習が課せられていました。新入生の皆さんも、是非、「雨か嵐か」などの応援歌を覚え、大きな声で歌つてください。応援歌練習を積み重ね、試合で応援すると、きつと満ち足りた気分が、そして仲間としての一体感が醸しだされ、そこに喜びと笑いにみちた空間に包まれるでしょう。対一高定期戦の応援の伝統もその現れだろうと思います。

仙台二高でのこれから、「ともに」ともに いそしまむ いざいざ怠らず、勉学研鑽と身体運動が重なり合う、「文武一道」に努め、仲間と一緒に、真摯に励んでください。そのように集中すると、いつもは気づけない、心の奥深くにある本来の「自分自身、自己」の姿を発見してしまふことがあります。そのような心の声を聞くことができていると、「自分自身」の、氷山の一角に過ぎない、表面に見出される「自意識、自我」に頼つてしまいます。

純粹無垢な、なにもものにも穢けがされていない白鳥のような新入生みなさん、三年後には飛び立つてしまいます。三年間、本来の真の自己探求に励み、心の奥深くにある「自分自身、自己」に限りない信頼を寄せ、その秘めたる小さな種子を丁寧に育んでください。一人ひとりの「文武一道」を試行錯誤しながら開拓してください。

仙台、東北、日本という「ローカルな地域社会」と、ウクライナ、パレスティナ戦争と混乱の度を深めている「グローバルな地球社会」の一員として、近い将来、なにかの作りの出、厳しさを乗り越えて、その厳しさのおかげで身近な人々にありがとうといえる人間としての成長を祈念いたしまして、祝辞とさせていただきます。

令和七年四月八日

宮城県仙台第二高等学校同窓会

会長

佐藤一郎

